
今日の村山

名前も知らない木なんです

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日の村山

【Nコード】

N5357Y

【作者名】

名前も知らない木なんです

【あらすじ】

彼の名は村山と言った。村山じゃなくて篤志あつしと言った。村山は名字だった。そんな村山篤志は今日も意気揚々と学校に出る。彼もまた、普通の人間として生涯を送るつもりなのだ。

まあなんといいか始まりません。

第一章 プロローグ（前書き）

ここから始まる村山篤志伝。

第一章 プロローグ

10時方向を指した短針が視界に入ってくる、おかしいな。そういえば今日は入学式だったっけ？ じゃあなおさらおかしいじゃないか。ははっ、10時ね。こいつはおかしいや。

あ、駄目だった。

「さあて、村山君。事情を話してもらおうか？ いや、別にその事情が情状酌量の余地があれば私としては全くかまわないよ」

寝坊し、11時頃に颯爽と登校した俺は生徒指導室に詰め込まれ、いま俺はこうして体育教官小沢清治郎せいじろうにいびられているのです。

「なんというか…こう、バーンってね。なっただんですよ分かります？」

俺は言い訳に支離滅裂なことを言っていた。

「篤志君がバーンってなっただん？ で？」
知らねえよ。

「ええつとですね。つまりは、様々な理由が絡み合ってしまったんです」

「どんな理由かね？」

小沢のとなり立っている黒人体育教師ジャン・リカルドがいやな笑みで聞いてくる。何も考えられないのでとりあえず言う。

「来る途中で車に轢かれてしまったり？」

「うーむ、俺支離滅裂。」

「よく無事でいたね」

そんな人間居たら怖いつて。

「で？ ホントの所は？」

しつこいなこの男。職務だから許してやるとするか。

「いや、まあ、その、意識が飛んでたんです。10時まで」

小沢はふうっ、とため息をつきながら背もたれに大きく寄りかかる。そしてジャンに耳打ちをする。何やってんのか知らんが、物騒

なことを話しているようだ。耳打ちに対してジャンは頷いた。

「この蘭高校は由緒ある名門校なのは分かっているだろう？」

「ええまあはい」

「そんな高校で寝坊なんていう事でこんな時間に登校しているような生徒が見られるとこちらも厄介だね」

「寝坊じゃないです」

「一応食い下がったか？」

「じゃあ意識が飛んでいた理由は？」

「昨日の夜の話でした。あれは23時頃でしたでしょうか。私は布団に入っていました。そして目を閉じる。ここまでは良いでしょう。しかし、気がつけば周りは朝に、時間は翌日10時に。こんな事が信じられますか？」

「寝坊していたということかね」

「かなり遠い意味で言えばそうですね。私は国語的な表現からして

……」

「寝坊で良いんだね？」

「…はい」

俺はうなずくしかなかった。体育教師のにらみて怖い。

「…で、寝坊なんていう事でこんな時間に登校しているような生徒が見られるとこちらも厄介だね」

「大事なことなので二度言われたがたしかに一理あるな。俺が校長なら休んでもらっていた方が良かったと考える。もう一つ、いつの間にかそう指示されたのか、ジャンはいつの間にか俺の後ろにいやがる。私をどうするつもりなんです？」

怖いから聞いてみた。

「何、別に体罰というのは原則禁止だからね。ここで4000字詰め原稿用紙5枚分の反省文を書いてもらうだけだよ。じゃ」

小沢はジャンを残して部屋から出て行った。

「ああもう！ こんなの！」

俺は自らの失敗に腹を立てながらペンを走らせ始めるのであった。

背後に立つ黒人マツチヨに反抗するほど腕に自信は無い。

結局俺は反省文を頑張つて書き、部屋を出たときにはすでに二時を回っていた。さらに昼飯を食っていないため、異常に腹が減っていた。

「いやな因縁ができちゃったなあ」

体育教師に覚えられるといろいろめんどくさいからなあ。仕方ないのでもう新入生が居なくなつた校舎を見て回り、帰路につくことにした。

第二話 初めての蘭高校（前書き）

昨日は寝坊のせいで体育教師に捕まっ
ていやな思いをした村山。
しかし彼はめげずに今日も登校する。

第二話 初めての蘭高校

翌日

俺の家族構成は父、村山 一成^{かずなり}。母、村山 柳子^{りゅうじ}。兄、村山 遼^{りょう}史^{うし}。俺。妹、村山 三奈^{みな}。という感じで構成されている。難の変哲もなく、親が海外行ったりしてなく、女系と言ったわけでもない。腹正しいのは妹が異常に俺のことを嫌っていると言うことだ。ついでに兄のことも嫌っているが、兄も俺も温厚なので全てを優しく受け止めてあげている。さらに妹は何故か父のことも妹は嫌っているのだ。思春期の妹としては相応の反応だ。妹は我が家の男を全て見下しているとさえ感じる。しかし、逆に父は妹のことを溺愛しているので、妹の男関係とかの話になるとめっちゃめっちゃになる。妹に暴言を吐かれた時なんてそれはもう…。

そして朝ご飯。

「なんで昨日は起こしてくれなかったんだ？」

「あら、昨日なにかあったのかしら？」

俺と妹と父が座っている食卓。兄は寮生活なのでもう朝ご飯には顔を出さない。休日ぐらいいは来てくれると思うが。母は台所において、母に俺は昨日の事に対する問いを投げかける。

「あなた今日が入学式っていつてなかったかしら？」

莫迦な。俺がそんなことでミスをするとても言うのか。試しにカレNDERを見る。

「ありゃ？」

一日だけ日にちをはき違えていたらしい。俺のバカヤロウ。

「バカアニキだから仕方無い事よ。まったくこれだからうちの男は」

妹が実にやかましい暴言を吐く。しかしそれに反応したのは俺ではなかった。

「おいちよつと。それ私も含まれてないか？」

どうしてなぜか親父がうるたえる。お父さんはそこで会話に入るんだね。

「あら？ お父さん自覚無かった？」

妹自身も親父のことも含めての言動だったらしく、妹は親父に対し冷ややかに言い放ってしまった。親父は箸を持ったまま止まる。しかも豆腐を掴んだまま。あれ絹の方だろ。

「…」

箸が落ちる音が響き、親父の魂は彼方に消えてしまった。絹豆腐も味噌汁のなかに墜ちていった。全く…。

「こら三奈。お父さんはお前の事を溺愛しているんだからそんなことを言えばどうなるか。15歳になるんだから分らないはずもないでしょうに」

俺は忠告してやる。ホントこの妹は辛口過ぎるんだよな。成績良くてルックスが良いのが気に入らないが。

「うるさいわよバカアニキ」

「三奈、何でもかんでもかみつかないの！ お父さんだって頑張ってるのよ？」

三奈のことを母がしかる。心の底からざまあみる。晴れやかな気分で吸う味噌汁はまた格別だ。ヒヤッヒヤッヒヤ。

「はい」

返事を延ばすなよ全く。

「ごちそうさま」

気を失ってよだれを垂らしかかっている親父を傍目に俺は食器を手早くシンクに持って行く。妹は行儀良く食っている。

「今日はできるだけ早めに行くよ。母さん。昨日目を付けられたこともあるし」

「分かったわ」

「バカだからしょうがないわよ」

やっぱ妹はかみついてくる生き物だった。

「三奈。お前学校では絶対猫かぶってるよな」

この性格なのに集まる女子は妙におしとやか。この前家に招き入れてきた女子もお嬢様的な雰囲気を出していた。こりゃあ黒だな。前から知っていたが。

「あんたは私の中学校と関係ないでしょ！」

「三年生なんだからもう少し慎みを…」
持つて欲しいね。

「あんたは私の親じゃない！」

「そりゃ台所に立っているおばさんとそこで気を失ってる親父が親だ。当たり前だろ」

「ぐぬぬ…」

妹が歯がゆいに行った表情で睨んでくる。そんなに睨んでも何も出てこないからな。

俺はさっさと妹を無視しつつ自室に戻り、着替えて家を出る。

「行つてきます！」

「行つてらっしゃい」

母の爽やかな送り出しの言葉と、

「帰ってくるなバカアニキ！」

妹の不愉快な追い出しの言葉。てめえの音波には俺の鼓膜は反動できないぜ。とはいいつつもコミュニケーションをしてるだけ俺&兄と妹の関係は悪くないのかも知れない。不愉快だけど。

颯爽と玄関を開け、真っ先に駅へと向かう。蘭高校は何かと交通の便がよいのでありがたいこと限りなし。これが山の上だったらホント参ったことです。

さて、これから学校生活が始まるわけだが俺はまだクラスの奴と顔を合わせていないと言うね。とりあえず友達作って3年間を乗り切るといふささやかな願いを叶えよう。

第三話 デモンストレーション(前書き)

デモンストレーション

第三話 デモンストレーション

案外、クラスの目は厳しくない。昨日は慌ただしく、友達云々言っている暇もなかったらしい。俺にもついている余地ができたのは僥倖だ。

「と言うことで皆さん。昨日は慌ただしくてできなかった自己紹介です」

俺の状況説明をわざと遮るかの如くそう切り出したのはこのクラスを担当する女性教師。南山悦子みなみやまえつこという、男らしすぎる粋な美人。その顔のせい、若さの割に妙に貫禄が出ている。資質、と言う奴やつなのだろうか。とまあ、先生に対する批評はここまでとする。

自己紹介と言えば先陣を切って1番目が指名されるに違いない。一応これでも何度も自分の自己紹介を反芻してきたのだ、最後のチエックと行くか。えーっと私は16歳の独身…。しかし俺の予想は余りにスウィートだったということがここで分かってしまった。

「では、昨日来なかった村山君」

クラスがざわめく。知らないんだけど、俺から？ ……なんでだよ！

口答えするぞ！ そう、いきなり俺が呼ばれてしまったのである。

「え、先生。私最後でも最初でもありません！」

この女、俺に何か恨みでもあるのだろうか。

「文句あんのか？」

江戸っ子がよこの女。いや…江戸っ子か？

「あります！」

とにかく生徒の主張は受け入れるべきだと思っんですよ。

「黙れ！」

ビクッ！ 俺の体は硬直する。生徒の主張は受け入れてもらえなかったよ…。しかもこの女は思ったより体育会系だった。目は大分つり上がってるし、反論したらどうなるか分かったもんじゃない。いや、分かっているのだがきつと認めたくないだろう。頭が。

「お前は担任の私の言うことを聞けないのか!? ああん?」

いつの間にか鼻先18?の所まで顔が来ているという状況、超スピードとは恐ろしいの。ほんとマジ勘弁してください。あんた昨日ラーメン食ったでしょ、息で分かりますよ。絶対言わないけど。

「いや、その…まあですね。世間の常識では…」

「ここでは私がルールだが?」

何だよこいつ! 独裁政治かこいつ! 誰か助け船を…だめだ、みんな初対面だった。グヌウエ!

「いや、その…あれですか?」

「何が…あれなんだ?」

もつと近づけてくる先生。あんた女じゃないのかよ。他の男子の中にうらやましそうな目で見ている野郎どもが多少居る。代わってやるよ。できたらな。

「えつと…先生は私に何か恨みでもあるのでしょうか」

「無い」

余計分からね。新手のいじめか?

「じゃあなんでわざわざ私から始めよう?」

まさかもう先生の間ではある程度の話題になっているとか、まさかあの程度でな。

「お前の名前を職員室でちよくちよく耳に挟んでな、その時名簿でお前の名前を調べたんだよ。あ、こいつ来てない奴だと思っただな。

そしたらこのこ悪びれもなく今朝現れたってわけだ。これ以上理由が要るか?」

要りません、もうどうすんのよこれ。早速俺の名前が知れ渡っちゃまったじゃねえか。たかが寝坊でなんでこんな目に…。そんな思いを振り払うように俺は唇をかみしめ、拳を握りしめた。切り忘れていた爪が肌に刺さって痛くって反射的にパーになった。

「お? どうした? 目尻に涙が出てるぞ」

こいつは先生じゃない。鬼だ。もういいこれ以上粘ったって無駄に目立ってしまうだけだ。あ、手遅れだったわ。

「分かりましたよ！ やりやあいいでしょやりやあ！」

俺はそう言つてスタンダップ。Y A K E K U S O !

「よし、その意気だ。おゝいみんな。今から村山篤志が自己紹介するつてよ！」

俺は切つてやったさ。南山ババアにこの上ないメンチを。でもな？

世の中には見ちゃいけない顔つて言うのがあつてな？ とくにこの女の切れちまったときの顔なんだがその顔を見ちゃうと耐性のない奴は失禁しちまうほど恐ろしいらしい。

「…なにか文句でも？」

こわいよ！

「いえいえいえいえいえないですないですつて！」

「よろしい」

そう言つて先生は般若を止めて教卓前に戻つていった。

「クスツ」

クラスのどこかで笑い声起きる。おいおい、笑い事じゃないぜ。本当だつてば。

「えー皆さん。静粛に」

俺はクラスが一定の静かになるまで手で制す。うむ、まあまあのコンディションじゃないの？ 俺は口を開いた。

「ええー、北西中学から来ました村山篤志です。…それと16歳で、カレーです。好きな食べ物。それと頑張ってください」

これで終わりですよいですよね先生。チラツと見てみる。何か睨んでいるような気がしないでもないが、知らん！ 座る！

「チツ。えー…じゃあ一番から自己紹介頼む」

一番の生徒「ヒヤイ!？」

教師のくせに舌打ち!？ しかも結構ふにゃふにゃしてた1番目の男子が呼ばれた途端に直線になるとか…どれほどのプレッシャーを孕んでいるんだあの女…。

そんな感じで自己紹介は俺の左後ろの奴までいった。

「じゃあ次、宝条椿姫（ほなぢいしんぎょ)」

先生に呼ばれた瞬間男子の目は一気にそこに注がれる。いったい何
が起きようとしているんだ？ 宝条が椅子を引き、立つ音が聞こえ
る。いままで全く無関心に聞いてきた俺だったが他の男子の反応が
あまりにも顕著すぎたので、とりあえず後ろを向くことにした。

「宝条椿姫。天翔中学から来ました」

そこには美女？ 女神？ ビーナス？ のような、もう美という形
容単語が付かないと失礼な気がしてくる女性が居た。これは確かに
男子の反応も頷ける。しかしこれほどだと遠慮して告白すらされな
いって言うパターンであることが予想できる。

「宝条家の正当な跡継ぎとして、頑張りたいと思います」

ああ、やっぱり両家の出か。そう考えると、たしかに余り垢抜けて
いない気もする。ような気がした。

そのまま宝条は席に着き、頬突きながら窓の外を眺め始めた。う
む、絵になる構図だな。見とれちゃうな。

「いつまで宝条を眺めている。村山」

ああ、入学直後でもうミスった俺の高校生活。そう考えながらも
脊髄反射により一瞬で前を向く俺。いやまて、ここで焦ればより俺
の立場が危うくなるんじゃないか？ ここは自然体で行こう。さら
に後ろから宝条の視線を感じる、痛い。つい首元を押さえる。そし
たら視線の痛みは頭頂部に移動してしまった。

「じゃあ自己紹介は終わりだ。では…」

そのあと先生はある程度の話をして、教材を配ってHRを終わりに
にした。聞けばこのあとは何もやらないらしく、好きに部活を見て
いけだそうだ。さて、周囲の誰かを誘うことにしよう。

第四話 武藤武史少年（前書き）

村山はとりあえず前の人間に絡むことにした。
前の人間は武藤と叫んだ。

第四話 武藤武史少年

この蘭高校は平均学力がある程度高めな学校で、それ故両家の人間だとかと一般庶民が混同して存在するような高校だ。要するに、様々な人間が居ると言うことだな。

「さて…」

俺は周囲を見渡す。一部を除いて、ほとんどの生徒が一人で帰りの支度をしている途中だ。よし、ここは無難に前の男を捕まえよう。

「ヘイ」

俺は前の男の肩を叩きながら声をかける。すると、前の男は振り返ってきた。

「なんだね？」

この男、妙に偉そうな口ぶりである。特徴としては、少し老けた顔なのに妙に良い体格をしている感じだな。

「いや、このあと暇か？」

当然だが暇でなければ他を当たるつもりだ。

「拙者は剣道部に真っ先に寄るが…そのあとは暇だね」

剣道志望か…たしかに腕の筋肉が豊富な事が見て取れるほどにある。

「よし決めた。お前にくつついていく。名前なんだっけ？」

「さっき自己紹介で言った…武藤武史むとうたけしでござる」

「よし覚えた。じゃあ行ってみようか！」

「…一人の方が良かったのだが。まあよいか」

武藤はめんどくさそうだったが俺はめんどくさくないので問題ない。剣道場というのは知っている人も居ると思うが、臭い。これはまあ仕方の無いことで、真夏にあんな装備であんなに動き回り、なおかつ洗わなければあんな臭いになるのは仕方の無いことだとは思っただが受け入れぬ。

「あそこにいる御仁を見てみよ」

武藤がある方向を指さす。それをたどっていくと、周りの部員が地

稽古してる中で、一人だけそれを見張るように立っている男が居た。なんか強そう。

「なにかこう…オーラってもんが出てますよね」

「知らないと？」

武藤が信じられないような口ぶりで言うが、一般市民から見ればそんなもんなんですよ。

「すごいのか？」

「中学高校今まで県内の大会全てで優勝し、全国大会では必ず二位か一位を取るといふ御仁でござる。今年でもう高校3年目で、名前は如月剣きんづきと言いう。しかしだがな…面白いことにあの人と必ず優勝争いをするもう一人の人は女性なのだ」

「剣道って男女混合だったっけ」

「いや、普通は男女で別れている。しかし、その女性は実力が高すぎて女子では敵無しだったそうだ。興味本位で特別に男子の大会に出してもらったらしいがそしたら優勝してしまったのだ。それから普通に参加するようになってしまったのだよ」

「へえ、すごいなそりゃあ」

「拙者はその女性を大会で遠くから一度だけ見たことがある」

「美人なのか？」

「美人であり、なおかつ凜としている。大和撫子をそのまま再現したような御方であった」

「なるほど…かなりの美人と見た」

少し時間が経ったら武藤が前を向いて目を輝かせる。

「如月殿が地稽古に混ざったでござるよ」

「どれどれ…」

俺は探してみる。分かるわけ無いじゃん面被ってんのに。と思いつつ視線を軽く泳がせだけで何故かその人が分かってしまった。本当に全員面をかぶって顔が分からないのに何故かその人は分かっちゃった。動きが一人だけ違うのだ。動きを見ると、ホントに実力があるってのは素人から見ても分かるというか…よく分からん。

とにかく相手の竹刀をよく見て、振り始めた瞬間に小手を打つ戦法が多い。しかもそれは前触れもなく動き出す行動、無拍子と言つらしい。さらに振るスピードも速く、竹刀が見えなかった。勝てるかあんなの。

「さすがでござるな。あんな人間が二人も居るなんて驚きでござる」
「ああ、絶対正面から戦いたくないな」

「村山殿は闘争本能が刺激されたりとかしないのでござるか？」
「あればいいな。そういうの」

闘争本能よりも恐怖が先行しますって。あのスピードで振ればきつと紙如きなら一気にスパッといくだろう。ついでに俺の頭も。

「こりやまたドライでござるな」

「しょうがないじゃない、怖いんだし。ところでいつ戻るんだ？」

「今日はもうそろそろ剣道場を撤収するのだが」

「じゃあそのあと学校散策をしてから帰るか」

「…うむ」

そこで地稽古が終わり、剣道部は休憩し始めた。面を脱ぐと汗だらけ…これぞ男だな。

「村山殿、拙者は如月殿と少し言葉を交わしたいのだが…よろしいか？」

我慢ならんといった感じで武藤が頼んでくる。おそらく如月という人は高校剣道でもとんでもないレベルの人で、その人と話したいという気持ちはよく分かる。

「よし、行ってこい」

「かたじけない」

武藤は音を立てずにすり足で走っていった。もしかしたらあいつも剣道すごいんじゃないか？

第五話 武藤武史少年と文芸部（前書き）

文芸部室前にてトラブル発生。

第五話 武藤武史少年と文芸部

「いや、感激でござるよ」

とろろんとした顔で帰ってきた武藤。そこまでうれしいのか、お前。「うれしそうだな」

「ただ話せただけじゃないのだよ。拙者めの力量如きを認めてくださっていたのでござる」

「そりゃあ、お前がすごいんじゃないのか？」

「いやいやまだ拙者。ものふとしてはまだまだ…全く最初から成長してござらん」

目を閉じ、むうと言った顔でうなずきつつ話す武藤。そう言う奴に限って強いというのが世の常である。

「じゃあとりあえず見回るか」

俺は何もプラン無しで引き連れることにした。

と言うことでまず文化部の確認。こいつは入る気はさらさら無いだろうが、俺としては運動部に身を置くほど自分の身をタフだとも思っていない。ということ、文化部入ろうかなみたいな気分で文化部が密集する特別教練にやってきた俺である。

「文ゲイ部？」

「文芸部でござるよ。村山殿」

「ああ、いや分かってたんだけどな」

文芸部という張り紙の張ったドア。部活動勧誘は剣道部を見ている間になりを潜めているので、現在は各部活動が自然に部活をやっている様子が見られる貴重な時間なのだ。

「どんなことやってると思う？」

俺は聞いてみる。

「やはり本を書いたりだとかそう言うことをやっているのでは？」

文の芸術、そんな意味で文芸であるから」

「いややっぱりそうだな。乗り込む？」

「仮にも先輩方だ。失礼は無きよう」

ふ、文芸部がそこまで堅いはずがないではないか。

「よしいくか」

俺はまずノックをする。

「一年生ですが部活動見学をしてもかまいませんか？」

そして確認を取る。面接の基本だ。

「ええ！？ ちょっと待つてください！」

なんだ？ 予想と違う返答だな。

「入っても良いですか？」

さらに聞いてみる。反応に期待しちゃうよね。

「ホントに待つてください！ 今は絶対開けないでください！」

そう言われると……もっと開けたくなくなっちゃうなあ……！！

「開けますよ？」

「ちょ！ 村山殿！ 無礼はないようにと言ったではござらぬか！」

「……ちえ」

ドアの向こう。文学少女である西曉寺静（西いぎやうせいしずか）は自らを小説の主人公に見立て、西曉寺家の余りある財産を使って衣装を作り、やっと部活動見学が終わったと言う所で安心し、そして衣装を着込んで一人劇を始めた途端にドアをノックされたのであった。

そしてドアの手前。

さて、開けるかな。

「村山殿。まだOKは出ておらぬよ」

ドアに手をかけた所で後ろからグサッ。

「いいじゃん」

「仮にも先輩であるのだぞ？」

武藤の声をスタイリッシュに無視してガチャッ。……ああん？

「ああん？」

つい声が出てしまった。声は心にとどめることはできないのだよ。

村山君。決してメンチを切ったときなどに出す声ではなく、いきなりの出来事に状況がよく分からなくなっているときの声だ。ああ

ん？

「……………」

目の前の女性も状況が分からないようで、パンツとブラジャーの姿で固まっている。さて、何をやっていたのでしょいか。

「村山殿…いい加減に…ん？」

ドアの影になつていて見えなかつたようで、現時点で武藤は気づいたようで、口をあんぐり開けたまま固まっている。ここで俺の意識が最初に復活する。

「いやあすいませんね。顔洗って出直してきます」

そういつて笑顔のままドアを閉め、スタコラサツサ。美人だったが、その下着を見ることはできたが、いかんせん罪悪感にさいなまれてうれしくない。

「あああああ！」

その後、その人らしき人間の叫びが聞こえてきた。すいませんでした。

「あえ…？ 村山殿。拙者はどこへ行つていたのでござるか？」

俺がさつさと手を引いて一緒に退却してきた武藤はここで気がついた。しかし女性の着替えのシーンをつい見てしまつて固まるなんてシチュエーションは存在したのか。妹の場合は反応速度の問題で、こつちが視認する前にぶつ飛ばされる。

「heaven(天国)」

「そつでござつたか…つてそれは拙者が死んでいたとつてことであるか！？」

「まあ良いんじゃないか？」

冗談が通じないなこの人！

「それは良くないことであるぞ！ 浄土に行くというのはものもの一生を終えると言つこととござる！ 重大でござる！」

「あゝ！ もう嘘だよ嘘！ ただ意識がどっか行つてただだよ」

「それならいいのだが…」

ウェーブが激しいこの男は。

「で、これからどうする？ 俺はもう探索飽きたぞ？」

次の予定について聞いてみた。

「拙者は剣道を見られただけで満足でござる」

「じゃあこのくらいで良いか」

「解散でよろしいか？」

「そうしよ」

と言うことで、俺達はそこから解散し、帰路に着くのであった。

第六話 兄と俺と妹（前書き）

自分で自らの歴史を振り返る村山。

第六話 兄と俺と妹

木曜日に行われていた入学式。残念ながら参加できなかったのだから先に目を付けられる。

金曜日、オリエンテーションを兼ねたホームルームと教科書の配布。それと部活動見学で下着を見た。ついでに武藤という仲間ができた。

休日の昼下がりに、入学式を終えた俺にちよっかいを出すためか、寂しくなったのか兄が帰ってきていた。ダイニングにて俺はミカンを食いながらテレビを見てみると、兄が話しかけてきた。

「はあ……」

自分の過去を振り返って（いままでの過去は無しとして高校からの話ね）ため息をついちやう俺様。

「弟よ、何をため息をつく？」

それを見て問いを投げかけてくる兄。ちなみに兄はいつもこんな口ぶりだ。

「それはこれからの高校生活に対し、悪い予感しか感じ得られないため」

「そして、それを直すために篤志は何をする？」

「努力」

「勇気」

「勝利！！！！」

「うっせーよ！！」

リビングにてのんびりテレビを見ていた妹が俺達に怒鳴ってくる。母はお前をそんな風に育てた覚えはないそうだぞ。

「まあいいではないか妹よ。兄のめでたい入学式なんだぞ？ 中学校から兄が消えてさぞかしうれしだろう」

「こらあんだ。それは俺に対する文句かね？」

「…バカアニキが居なくなっって清々したわ！！」

「そんなこと言うと勉強教えないぞ」

分からないことを一回鼻で笑ったら鼻を殴られたことがあったしな。これから独り立ちをする良い機会だ。

「それだけは止めて！」

妹はこの一言にだけは弱い。

「ッフ」

その反応に鼻で笑ったらいきなり妹が立ち上がり、一気に間合いを詰めてかかってきた。運動能力は一流なんだけどな。少しブレインがウィークなところがプロブレム。

「このクソ兄貴！！！」

バカアニキを昇進しました。そして、鉄拳が飛んでくる。オフウツ…。

「ハツハツハツハ。お前達はいつも仲が良いな」

兄がケラケラ笑っている。こっちは鼻が痛くて涙流してるんだけどな！

「なんでこいつと私が仲が良いのよ！」

妹が俺を指さしながら兄に怒鳴る。人を指さしちゃいけないって親に教わらなかつたのか？ おい俺の親！

「いやだつてね、世間では結構妹と兄との仲が希薄になってくる世帯が多い。しかしお前達は今でもそんなにコミュニケーションを交わしている。それは実に素晴らしいことだ」

「なんで素晴らしいのよ！ 大体こいつがいつもちよっかい出してくるからいけないのよ！ いけないのはこいつ！」

「そのころ妹は心で…（いつも寂しいのよ！ お兄ちゃんも最近はおまっしてくれなくなってきたし…）ゴフウツ！？」

いってえ！ 心の声らしき理想をやってみたがやっぱり殴られるよな。

「やっぱり仲が良いじゃん」

さらに腹を抱えながら笑う兄。

「…もういいもん！！！」

あらら、ドアを開けて出て行っちゃったよ。

「…アフターケアは？」

兄が問いを投げかけてくる。

「無し」

俺はきつぱりと答えてやった。

a f t e r 入部

入部の時

俺は昼休み、前の武藤と入る部活について話していた。しかし、武藤はすでに入る部活は決まってるらしい。見当が付く。

「お前は剣道部だよな」

「いかにも」

いかにもといった感じでいかにもと答える武藤。まあもともとこの男に同じ部活を期待しているわけではない。俺にだってその程度の自立心はある。

「さまざまな部活を見て回りました」

俺は切り出す。

「そして？」

「そして私は思ったんですよ」

「どこの部活にするか？」

「文芸部でいいと思いました」

俺がそう言った瞬間。武藤が俺の後ろの方に目を向ける。なにかあったのか？

「何かあったの？」

「いや、別に何も無い…まあ文化部の中では実績もある故、それは良い判断だと思われる」

まあいいか。

「他にも生物部や、化学部を見て回ったがどうにも趣味に合わん。生徒の風が」

なかなかクラスの中でも卑屈な奴が集まったりするが、俺はそういった奴は嫌いだ。自己主張をしないやつはまず受け付けられない。

「結構好き嫌いが激しい？」

「ああその通りだ」

「…まあ村山殿の好き嫌いはさておき、文芸部に決めた決定的な理由はある美人の人かね？」

「それもあるが、違う。」

「あとで話してみただけで結構気さくな人だった。下着姿を見たことに関しては一応謝つといたよ。お前に代わって」

「…ちよつと待つのだ！？ お主拙者がドアを進んで開けたと進言したのか！？」

「ちよつと悪かったかな…いや、過ぎたことを責めることは良くないことで、これに関しては保留だな一生。うん。」

「まあ、いいんじゃないかな？」

「良くない！！」

「気にするな。ところでだが」

「なんだ！」

「ははは、怒つちやつてえ。」

「俺が文芸部に入ることにしたのはもう一つ理由があつてだな。あの美人の人はなかなか良い家に住んでいるようで、近い人間に対しては先生の口が出しづらいらしい。したがってあそこに入れば俺のスクールライフはベターノーマルになるわけだ」

「先生に悪い意味の特別扱いを受けるのはごめんだからな。」

「なるほど」

「そう言うことだ」

「俺が理由を伝えるのと同時にこいつの怒りはすぐに鎮んでしまったらしい。思ったより簡単に鎮んでくれたが、少し拍子抜けだった。」

「で、今日入部届を出すということか？」

「昨日出したよ。なんかあの入部員が定数まで今まで行ってなくてしかも俺含めても足りないからもう一人欲しいとか何とか言ってきたよ。お前は？」

「まだ入部届出してない故、兼部ならできるが…」

「顎に手を当てながら考える武藤。駄目だろ、お前は剣道頑張らななきゃ。」

「いやいや、お前は剣道に打ち込め。大丈夫だ、何とかするから」
ホントにそう思う。

「…村山殿はやはり拙者の見込んだ男よ」
腕を組みつつにやにやする武藤。気持ち悪いぞ。

「できるだけ定数には届かせるよう頑張るからな。じゃあこれから
五時限目始まるしこのあたりで話は終わり」

「御意」

さて、放課後どうするか考えなければ。

第八話 文芸部 存続の危機！？（前書き）

しかしそこまで危機じゃなかった。

第八話 文芸部 存続の危機！？

文芸部室、俺にとって最初の活動の日。

「さて、村山君」

西暁寺さんがまずホワイトボードに一筆、部員の定数と書き込む。

「この問題は我々にとって死活問題なのは分かりますね？」

「もちろんです、プロですから」

全くお笑いだ。

「そして、我々に残されたタイムリミットは……」

その時、ドアが外側からノックされる音がした！

「今の聞いた！？」

西暁寺先輩が聞いてくる。

「ええ、とりあえず私が開けてきます」

「頼んだわよ」

俺はおそろおそろドアへと向かう。そして、まず一言。

「目的を述べよ」

一拍おいてから返事が返ってきた。

「此の部活に入ることだ」

女性の声だな。

「よろしい」

レディーに手を煩わせることは私の騎士道に反する。

「どうぞ」

俺はドアを開ける。すると、予想外の人物がそこにいた。

「…こんにちは、宝条椿姫さん」

見とれるような、いや見とれてしまう。

「いつまでもそこにいると入れないのだが」

ずっと見つめていたからだろうか、顔をすこししかめながら退くように言われた。しかめっ面も似合うなんて…こりゃ絵画だ絵画。

「いや、すいませんね」

俺は大人しく退く。しかしなんだ、本当に文芸部に入りに来たのだろうか。…俺にとってはさらに手を出しづらくなってありがたきこと限りなしなのであるが。

「…あなたが入部希望なの？」

あれ？ 西暁寺部長がいきなり剣呑な雰囲気醸し出したぞ？

「いかにもそうだ。私はここに入部したい」

「なぜかしら？ ライバル財閥の末裔同士なのに同じ部活に入れてやるとでも思ってる？」

あら、お知り合いかしら。

「ここは学校だ。そう言う分別ぐらいならつけられる御方だとは思っていたのだが」

「あら、昔からの因縁のほうが優先じゃなくて？」

喧嘩だなこれは。西暁寺先輩って結構気性が荒いのだろうか。そうは見えなかったのだが、見た目に騙されたか。その前に速やかに止めないと。

「お二人さん。そのくらいで口論はおやめになさい！」

俺はそう怒鳴った。しかし二人は少し俺の方を見て、そのまますぐにまた向き合ってしまうのみであった。

「私は初めて自らの力で学校に来たのだ。したがって私は家柄などにとらわれず、ただ一人の女生徒として」

宝条はそのあと少し俺をチラ見して、

「学校生活を楽しみたいのだよ」

そう言い放った。しっかし俺の存在感の薄さにはしのびも感嘆の声を漏らすんじゃないだろうか。

「…面白いわね、あなた。なんか変なむかつきも消えたり入部を許可するわ」

しかもなんか和解ムードになってる感じだ。

「それとあと、あなた今恋をしているのかしら？」

西暁寺先輩は一回俺の方を見てから宝条に言葉を投げかける。

「いや、恋というか……うーむ。まあ、面白いやつだなとは思っている」

宝条は俺の方を見ながらそう言う。面白い奴だとお!?

「人数揃ったしさっさと活動に入りましょうよ!」

俺はさっさと話を中断させる。そして、大きな音を立てて椅子に座った。空気だったという過去を振り払うために。

第九話 文芸部として

机を挟み、宝条が俺の正面、西暁寺先輩が右側に座る。

「結局部員の定数までの件は伸ばせませんでした^{くたり}」

早速メタ発言です。作者の思いを代弁しないでもらいたい。

「それはメタ発言だと思うのだが」

宝条が適確な突っ込みをした。

「あら、私としたことが失礼。オホホホホ」

乾いた笑い声だ。

「で、どうします?」

俺が口火を切る。そもそも俺が最初に切らなければきつと一生始まらない気がする。

「まずは、文化祭に向けての長編小説と…図書室に置く用の短編小説を作りましょう」

行動はカオスだが活動は普通だったわ。うーむ、何か物足りない。

「私は思うのだが、文芸部ならいっそ小説大賞に応募してはどうか」

宝条がなにげに素晴らしい案を出した。西暁寺部長は顎に手を当て考えている。

「私もそう思います」

俺も後押し。面白そうだし。

「合宿やるうかしら」

部長がいきなり…どうしてそういう答えになるんだ。

「いや、西暁寺先輩。文芸部で合宿って何やるんです」

「そりゃあ、枕投げとかねえ」

「駄目だ」

宝条がぱつさり切り落とした。nice job.

「なによ、何でもかんでも頭ごなしに否定する！ だから大人は嫌いなよ!」

「そうですね、他には何かありますか?」

喚きだした先輩の喚きをスルーして質問。

「なんで無視するのよ！ まあ良いんだけど！」
まあいいのかよ。

「…そうね、先代の人々が様々な文学賞を取っているのよ。さほど有名じゃないけどそれでもすごいこと。私たちもそれに習って文学大賞などに応募しましょう」

「じゃあ各々小説を書き始めよう、という認識でも良いか？」
宝条が質問をする。

「そうね。じゃあノルマを決めましょう」

案外書くと小説というのは期限が伸びがちだ。しっかりとしたノルマを決めるというのは正しい。

「一ヶ月で」

「三週間」

宝条が先輩に続いて言う。短くねえか？ いやまてよ？ どのくらいの規模の小説を書くかにもよるな。

「どのくらいの規模になるんです？」

「そうね…それも各々に任せるわ」

「書き方のコツとして何かあるのか？」

宝条がすこし呆れている。西暁寺先輩結局あまりしつかり者じゃなかった。

「私はその時思ったとおりに書いてるわよ？」

計画性を持って書かなければ伏線すら張れんだろう。

「それでは後々駄目になりますって」

「計画性を持つのも良いけど、その時その時で考えることも大切なのよ。篤志なら分かるでしょ」

たしかにそうだ。うむ。

「じゃあノルマ一ヶ月で良いでしょうか？」

宝条がしかめっ面になる。

「そんなに待てない」

「え、お前まさか三週間でも長いとか言うなよ」

「私は基本的に十万文字を三週間で仕上げる」

速い。美しい上に才能もあるってどれほど血に恵まれているんだ。

「じゃあ宝条は三週間で、私たちは一ヶ月でよろしい」

先輩がそうまとめた。何も変わってねえじゃん。

「それだと私が短くなっただけで何も変わっていない」

「宝条、日本は多数決だよ。全員一ヶ月と言うことでここは我々に
一歩譲ってくれるかな？」

宝条なら退いてくれるはずさ。

「…致し方ない」

「ありがとう！」

しかし俺には大きな障害があった。今回書く小説は俺の処女作になると言うことだ。基本的に稚拙な文章になる処女作。見せ合いつことかしたら笑われるかも知れないのだ。ありがとうなんて言うてる暇じゃなかった。

「今回はこれで解散」

西暁寺先輩が軽く頭を抱える俺とそれを無表情に見つめる宝条に対して言った。

第十話 宝条にメールしたばかりに（前書き）

宝条にメールしたばかりにめんどくさいことになった村山。

第十話 宝条にメールしたばかりに

「たっだいま」

「あら、おかえり」

家に帰ってから待っていたのは母の暖かい一言。妹は部屋にいるか部活だろう。

「今日の夕飯何？」

まず俺はこれを聞く。これを聞かなければ気になって何もかも手つかずになってしまうのではないか、というほどだ。やっぱりそれほどでも無い。

「豚汁にホツケの開きを焼いた物。そして白米よ」

魚料理か……近頃は肉料理中心の家庭が増えていると聞く。肉料理は飽和脂肪酸が含まれているので摂取するのは良いがあまりすぎると良くない。対して魚は摂取許容量が圧倒的に高い不飽和脂肪酸体にも良く、頭が良くなるという素晴らしい食材なのでみんなも食べよう。

「なるほど分かった。これで今日も勉強に集中できる」

「頑張つてね」

母の言葉を背に、俺は二階へと上がった。

自分の部屋は至って普通の男子生徒の部屋だ。特に散らかりもせず、アニメのポスターも貼っていない。張っているのはカレンダーのみで、モデルガン（m249）（¥69800）を一丁飾っているのみである。

さて、自分の部屋に来て何をするかというと小説の構想を練らなければならぬ。実際俺が書くと戦記物が軍事物になりかねない。日常やファンタジーなどもつてのほかだ。

「……やはり戦記物が良いか。宝条はどんなだろうか」

さっき交換した宝条のメアド。にやりと口が笑うのはこれを持っている男子生徒はほぼ一人。俺だからだ。だからといってそれが得だ

と言えはたかが知れていることなので得とは言いがたい。でもうれし

い。

と言うことで俺は宝条にメールを送った。

『やあ宝条。そなたは小説において如何様な構想を練っているの
であるか』

一分くらいで返信が来た。

『いま見合い中だからメールはすこし待ってくれるか』

ブホッ！ いきなりそれか！ ……しかたない。宝条の顔を立てる
と言うことでここはメールを我慢しよう。と、俺様が思うとでも思
ったのかね宝条ウウウツ！

『相手の男性はどんな人間であるか』

反応が楽しみだ。

『二菱社ふたひしの社長の長男だ』

ゲエエ！ 超財閥野郎じゃねえか解体されるやオラア！ ……いか
んつい熱くなつてしまった。しかし起伏のない文章だ。もっと焦っ
ている感じで書いて良いのに。

『で、本心はどうしたい？』

ずばり核心を突く良い質問を出したつもりだ。さあ宝条！ どう返
す！？

『早く小説の内容考えたりおやつ食べたい』

宝条らしからぬ文章だが…いやこれは宝条の本性だったり？ じ
つはしたいことがあるんだけど体裁ってものがあるから好き勝手に
きないって感じ？

『そこに食べ物はあるか』

宝条も気になるがそこにある食べ物も気になった人も居るのではな
いのだろうか。

『キャビア。トリュフ。フォアグラ』

馬鹿なあ！ 三大珍味が一堂に会するだとお！？ なに仲良くして
んだこの三大珍味め！ お前らなんか喧嘩しちまえ！

『お持ち帰りはできますか？』

でも食べたいんですよ。だって普通手が届かないじゃん。

『できると思うか？』

『お前ならできる！ 絶対だ！』

『そういうなら……ってやるか馬鹿！』

ほほう、乗り突っ込みですか。宝条の良さを一つ学んだぞ。良さがどうかはともかく。

レストラン ジ・ラムダトウ にて。

「さつきから宝条さんはたびたび下を見ていらっしやるのですが何か居たのでしょうか？」

二菱みつおはさつきから宝条がテーブルの下に腕を縮め、たびたび下を見ながらしきりに顔の表情を変えているのを見て心配になっていた。なにせ相手は見合い相手、自分の良さをアピールできないとこまるのだ。

「い、いや何でもありませんわオホホホ」

宝条はすかさず正面を向き、作り笑いをする。二人きりの見合いとこののは実にやりづらい……宝条椿姫はそう思った。

「ふう、よかったです」

二菱みつおは易々と納得した。

「学校ではどんなことを？ 一般市民の入る学校に入学したようなのですか何故なのですか？」

「一般の学校に入学しようと思ったのはもう少し世間を知ろうと思っただけですわ。蘭高校はあれでも一応私のような上位の人物も少なからず居られますので両親の反対も簡単に説得することができました」

二菱みつおには一般市民と共同で学ぶなど理解のしがたい行為だった。

「なるほど……」

だからそうとしか言えなかったのだった。

「個人的な人が多いので、学校では常に新しい発見がありますわ。

確かに私たちの生活も良いのですけど、一般庶民と共に過ごす生活も学ぶ所が多く、それはそれで楽しいのです」

宝条は思ったことを告げる。二菱みつおは一般市民を見下す典型的な貴族であったのでいよいよ理解できなくなった。だからだろうか、こんなことを言ってしまったのは。

「一般市民のような者とあなたは全く身分が違われます。私が素晴らしい学校に入学できるよう優遇させて……」

「あなたには落胆させられました」

宝条はキャビア、トリュフ、フォアグラに全く手をつけてない状態で立ち上がる。

「どういうことですか」

二菱は現状理解すらできていない状態で問う。宝条は無表情に答えた。

「あなたはまだ世界を知らない。親を見習ってもう少し広い視野を持って」

最後には敬語すらなく。二菱はそのまま硬直してしまい、宝条はゆつくりと歩いて行き、レストランをあとにした。

リムジンに乗り込む前に宝条は自らの初老の執事、東郷功とうけいこう

「無駄足だった」

宝条からのメールが遅い……気になるがここは小説を考えて気長に……お？

『見合いは終わった。全く最近の財閥息子は世間のことも知らないのか』

文句言うなよ。あいつらだってあれで頑張ってるんじゃないのかなあ？

『ところでお前そんな早いってことは三大珍味もう食ったのか？』
メールは一瞬で返ってきた。

『全部残した』

あとでぶっ殺すこのアマ。おっと……俺としたことが熱くなっちま

った。

『明日、いや今日覚悟しとけ。残された三大珍味の恨みを余り舐めない方が良い』

怒りが冷めたと思っただか？

『まあそう怒るな。それよりも小説の件についてだが』
長きにわたるメールを経てやっと小説の話題か。

『宝条はどんなジャンルで考えているんだ？』

ファンタジーか？ はたまたホラー？ 俺は非常に気になった。

『私としてはコメディで行こうと思っている。日常のな』

予想外過ぎる……。宝条のキャラとのギャップのせいで脳みそがオーバーヒートしてくる位予想外でした。

『宝条が書くのか？』

ゴーストライター居たりして。

『勿論』

畜生。じゃあ俺は元から無かった選択肢が一つ狭まって選択肢が減ってしまったなかったよかったと言っただか。

『まさか宝条がコメディを書くとは思いませんDEATH』

『村山も登場させるつもりだぞ』

させんなよ恥ずかしい。そうと聞けば立ち位置が気になる。

『どんな立ち位置で出すんだ？』

『女子が主観の小説だからおそらく恋愛相手か大魔王だろう』

『なんでラブコメの選択肢に大魔王が居るんだよ』

『気にするな。ところでだが、村山は私を登場させるつもりか？』

突然なんだ……。ここで出すというのは簡単だが俺が書くのは戦記。

しかも戦争映画などにおいて俺は恋愛要素が入るのを酷く拒絶する傾向にあるから絶対に俺が書く小説に若い女子は入らない。あつても故郷にいる妻がフィアンセを死亡フラグ作りのために登場させる位か。

『旦那を死なせたかったら出して良いよ』

お前もそんな事をするのはつらいだろう？なあ宝条。

『旦那は居ないのだが……』
いやまあそうだけど。

『いや、俺の小説だと戦記だから女子は全部死亡フラグ作るかも
ぶって決まってるのよ』

『せめて目立ちたい。お前の妻として出してくれ』
こいつ俺に死ねと言っているのか。

『俺はまだ死にたくない』

『私がこんなに懇願してるのに出してくれないのか』
なんでこいつこんな出たがるんだよ!!

『なんでそんなに出たがっている』

『私が出すんだから村山も出すのは当然』

いや、それは宝条が勝手に決めた事じゃないか？

『いや、まあ今決められる事じゃないし……』

『今決めろ』

厳しいな！

『じゃあ出さない』

決めろって言われたらこう答えるしかないでしょう。

『駄目だ』

この野郎。

『選択肢は”出す”しかないのか』

『当然だ』

『こだわるなあ』

『出すと言わないと今からお前の母親に挨拶しに行くぞ』

俺はすぐに窓から玄関の先を見る。そこには黒い長い車が……冗談
だろおいおいおい。

第九話 2 宝条にメールしたばかりに

『お前なにうちに来とんねんのドアホ』

『さあ言え』

車から宝条らしき人影が降りてきたし。うわこっちみんな。

『駄目だと言ったら』

『挨拶しに行く』

『駄目』

宝条が玄関に向かって歩き出しやがった。おい待て冗談ですよ！

『冗談冗談』

だめだ！ 全く携帯を見ていない！

「冗談ですから！ ホント止めてくださいうちの親はそういうのしつこいんですって！ 堪忍してつかあさい！」

俺は精一杯大声で叫ぶ。宝条は二階の俺を向く。

「じゃあ出してくれる!？」

なんでだよ……なんであなたはそこまでこだわるのですか。

「……」

俺は何も言えなかった。だからスタスタ行っちゃうのかあなたは。

「待って！ じゃあ男として出すのはどう?」

これなら良いだろ。

「駄目だ」

ぬおおおおおおお！ 八方ふさがりではないか！

「じゃあ宝条出さなければいいじゃん！ 俺なんか出さずに書けばいいじゃないか！」

それが一番楽なんじゃないか。

「だって出さないとつまらないんですもの」

俺はお前の何だ?

「……とにかく、分かった。お前はそんなに俺を出したくて、そして俺にお前を出して欲しいんだな?」

宝条はこくりとうなずく。ここは大人な私が折れてやるしか無かるう。怖いほどの執念だ、理由が分からないからさらに怖い。

「分かったならお引き取り願いたい。回れ右」

俺はさっさと宝条を帰らせるべく指示をする。宝条はきびすを返し歩き出した。しかし、門を過ぎたところで一度立ち止まり、此方を振り返る。

「どうした？」

「一つ言い忘れた。村山は私の下僕役で出すのだった」

俺は二階から飛び降り、奇襲しようとしたが怖くなって止めた。おれはすぐに自分の机に戻る。

宝条は去った。誰だ宝条を産んだのは、親の顔が見てみたいわ全
く！

「西暁寺先輩は……いいやっぱり」

さて、小説と言うものは主軸が必要だ。さっきまで考えていた戦記物は宝条のせいで設定を大幅に変更する必要が出てきた。だが！切り替えの早い俺のことだ。多分良いアイデアが浮かぶはず。

丁度その時、下で玄関の開いて閉まる音がした。妹が帰ってきたらしい。そしてそのまま急ぎ足で二階に上がってくる音がする。おかしいな、いつもならリビングである程度の時間を過ごすはずだ……。

「バカアニキ！！」

部屋のドアに警戒していた俺はしっかりと身構えていたがでもやっぱり本当に来るとは思っていなかったからびつくりした。

「突然なんだ？ 入るときはノックをして失礼しますだるバカチンが」

「そんなことじゃねえよ！ それよりもあんた彼女できたの！？」いきなりなんだこの妹は。俺の彼女はアサルトライフルだってこの前語って聞かせた記憶はないが彼女がいると言った記憶もない。

「誰に聞いたか答えなさい。折檻してくるから」

「何かりビングにすごく綺麗な人がいてさ！ 母さんと楽しそうに

話してた！」

「髪型は」

「長かった。すごく綺麗に縛ってあった」
宝条だ。

「いいか、そいつの言ってることは十中八九嘘だ」

俺はそう言っただけありビングへ。しかし宝条ってこんないたずらキヤラだったとは知らなかったよ。ぶっ殺してやりたくなるぜ。

リビングの扉の前。宝条がドアの先にいて母と話していると言う。どういった内容だろうか。

「初対面で告白された！？ うちの息子にそんな度胸があるなんて」
宝条、お前一体何を言った？

「ええ、私もその時は驚きましたよ。そのまま押し切られて無理矢理OKと言わされ。そして……そのあとの密会の内容ですがここから先はR-18です」

身に覚えがないって言うか想像すらしてないって言うか……。とにかく突入だ！ これ以上変な偏見を植え付けられるとまずい！ 家族の中での立ち位置が！ ガチャッパン！

「宝条！ 貴様なにを言う！」

俺はまず大声で宝条にかみつく。

「犯罪者が来たわ」

母がそんな事を言ってきた。宝条も冷たい目線で此方を見ている。ふざけるな、と言いたいですね。

「私は……ああ」

宝条がさも悲しそうな顔で頭を抱えてうなる。

「母さん！ この女の言ってることは全て嘘だ！ 信じちゃいけない！」

俺は声高々に主張。しかし宝条、お前はまだ知り合って一日目だったのに飛ばしすぎだ。

「女の子の言うことは正しいのよ。あなたが悪いの」

どういう理論だか知らないがとにかく息子の俺の方が宝条より信用

度が低いと言うことだけは分かった。駄目じゃんそれ。

「とにかく宝条の言っていることはまるつきり嘘だすよ！」

「村山は覚えていないのか……あんな仕打ち……」

おい、しつこいぞ貴様。

「とにかく！ 宝条は帰れ！ お前がいると駄目だ！」

俺は宝条を無理矢理引つ張って立ち上がらせ、玄関まで後ろから押し出す。

「こんな美人が来ているのにそんな扱いはないだろう」

「変人の間違いだ。さあ帰った帰った」

「そうか、帰るよ」

宝条は一瞬いままで見せたことのない暗く、寂しい顔を見せた。だがその程度でぶれてたまるか。

俺が無言で立っているのと宝条はゆっくりとドアを開けて出て行くとする。しかし、その過程に何度も静止するので聞いてみた。

「なんでそんなにちよくちよく静止するんだお前は！」

「いや、ここは呼び止める所だろう？ できるだけチャンスを与えようと思っただけ」

やっぱり演技じゃねえか。

「いらんわそんなチャンス」

「そうか……」

また宝条が暗い顔になる。いいからお前は早くいけよ。

そうして、ドアは閉められた。もやもやしたものは残らず、すがすがしい気持ちで一杯でした。

「長い件だった……」

粘りすぎだぞあの女。いやそれどころじゃなくて早く母の誤解を解かないといけないか。俺はそう考えながらリビングへ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5357y/>

今日の村山

2011年12月10日01時50分発行